

氏名	D i R i K SEVAL		
授与した学位	博士		
専攻分野の名称	文学		
学位授与番号	博甲第 5764 号		
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)		
学位論文題目	トルコ語チャナッカレ方言の述語形式		
学位論文審査委員	教授 栗林 裕	准教授 片桐 真澄	
	教授 宮崎 和人	准教授 田中 秀和	

学位論文内容の要旨

本論文はトルコ語の方言に出現する特定の述語形式に関わる言語現象を広く取り扱っており、学術雑誌への掲載論文や口頭発表した内容を中心にまとめられ、以下の全八章から構成される。

- 第一章 序論
- 第二章 共通トルコ語のテンス・アスペクト・モダリティ
- 第三章 アナトリア方言について
- 第四章 チャナッカレ方言の述語形式
- 第五章 チャナッカレ方言における述語形式-IK について
- 第六章 チャナッカレ方言における述語形式-mAk vā について
- 第七章 チャナッカレ方言のテンス・アスペクト・モダリティ
- 第八章 総括

謝辞、略号一覧、参考文献、資料

従来、トルコ共和国の諸方言（アナトリア諸方言）の記述研究は音韻論的あるいは形態論的な領域を中心に研究が進められてきた。一方、トルコ共和国全体の方言地図の作成に至るまでの詳細な分類や、それに必要な地域方言のデータは十分に得られておらず、本研究の対象となるトルコ共和国の諸方言のひとつであるチャナッカレ方言にみられる特殊な文法現象を示す言語データや、それ

に関する形態論的あるいは統語論的な研究は未だに不十分である (Karahan 2011, Bulut 2013)。特に文法化の観点からチャナッカレ方言の文法現象 (主に述語形式) を考察し、形態構造あるいは統語構造の特徴を示し、共通語との対照を行った上で当該方言と共通語の相違・類似を明示し、体系的な位置付けを行う記述的研究は重要である。

本論文では、今まで十分研究されていないトルコ語チャナッカレ方言の文法形式に関して、詳細な記述を試みたものである。具体的にはチャナッカレ方言に見られる特殊な形式である **-IK** と **-mAk vā** の形態的、統語的かつ意味的な記述と考察を行い、それぞれの形式の TAM 体系としての位置付けを行なっている。本論文では全体として主に三つの目的を掲げてトルコ語チャナッカレ方言の記述と構造の分析を行う。

- (1) トルコ語との比較においてチャナッカレ方言がどのように位置付けられるかの究明
- (2) チャナッカレ方言で発見された **-IK** 形式と **-mAk var** 形式の用法と使用条件の究明
- (3) チャナッカレ方言での同形式の文脈を伴う形での記述データの提示

トルコ語チャナッカレ方言は未だ十分な記述データが得られていない方言であり、本論文を通して、トルコ共和国のチャナッカレ市アイヴァジュック町及びサズル村で実施した現地調査のデータを提示し、今後の方言研究の発展に貢献することを目指している。

トルコ語の共通語であるイスタンブル方言では基本的な述語形式を成すカテゴリーとして名詞述語と動詞述語があり、それぞれの述語の形態論的なカテゴリーは主に動詞語幹に付加する形態素によって決まる。例えば、以下の名詞述語の構文の場合 **-IK** の付加によって、動的な現象が静的に転換し、名詞を派生する; **Bu kapı aç-ık.** (この ドア 開ける-名詞化) 「このドアは開いている」。一方、同じ形態素が地域方言 (チャナッカレ方言) の場合、品詞を転換せずテンス・アスペクト・モダリティが融合された形で動詞述語としても用いられ、過去・結果・状態・話し手の推定、さらには確実性といった意味が付加される; **Ali kapı-yı aç-ık.** (アリ ドア-対格 開ける- 結果/推定-3 単数) 「① (私が) アリはドアを開けた (と思う)」、「② ドアを開けたのはアリに違いない」。チャナッカレ方言では、話し手が出来事の完了による結果及びその結果による明確な痕跡を基に確実性の高い推定を表現する場合において「**-IK** 構文」が用いられる。

一方、述語形式の **-mAk vā** は基本的に知識・視覚・聴覚による情報および痕跡に基づく話し手の認識を表示する。これらは、チャナッカレ地方の南西に位置するアイヴァジュック町とサズル村周辺にのみ見られる文法形式である。ここでは存在表現 **var-** の文法化がさらに進み、動詞の不定形 **-mAk** に **var** が結合した結果、**-mAk vā/var** という新たな文末形式を成立させる; **Sen-in-le ö-mak vā.** (あなた-属格-後置詞 なる (いる) -不定形 ある) 「(彼/彼女は) あなたのそばにいるだろう」。述語形式である **-mAk vā** は推量や根拠に基づく推論により、出来事や話し手の思考などの新たな意味を表出する認識的モダリティである。一人称と共に起る場合は、話し手が後で思い出したことや、後で気づいたことを表示する。他の方言では **-mAk vā** の述語形式は確認されておらず、本研究の重要な成果の一つである。

本論文ではチャナッカレ方言に見られる・IK 接辞と述語形式・mAk vā の機能と用法を確定し、・IK 形式の位置づけを行い、文法化の方向性を明らかにした。チャナッカレ方言における・IK 形式は結果を表す特徴から展開し、状態や痕跡のある状況で話し手の主観を確実に表すものとなる。・IK 形式は出来事の完了と、それによって引き出された結果・状態を表す点で共通語の・mIş 形式にも似ているため、置き換えが可能だと考えられるかもしれないが、その置き換えの可否は確実性といったモーダル的な特徴により決定されることを明らかにした。また、・mAk vā 形式が話し手の推量を表すものであり、動詞の不定形に存在表現の var が付加した形で存在表現が内容語から機能語へ文法化した結果、一体化した形式に発展し、認知的モダリティを成すに至ったということを主張した。

学位論文審査結果の要旨

Dirik Seval 氏が提出した学位請求論文「トルコ語チャナッカレ方言の述語形式」に関する学位論文審査会は、2018年2月9日（金）14時より16時 まで一号館5階524言語系セミナー室で行われた。学位論文審査委員会は、栗林裕（主査：言語学）、片桐真澄（言語学）、宮崎和人（日本語学）、田中秀和（英語学、言語学）の各教員の合計4名で構成された。

初めに Dirik Seval 氏自身が論文全体の要旨を述べた後、予備論文で指摘された問題点に対してどのように対応したのかについて、要点を記したレジュメを用いつつ説明があった。引き続き、個々の審査委員から質問およびコメントが出された。

本論文はトルコ共和国のトルコ語のチャナッカレ方言の述語形式に関わる言語現象を広く取り扱っており、学術雑誌への掲載論文や口頭発表した内容を中心にまとめられ、全8章から構成される（総頁数 A4版182頁）。本論文の研究成果は以下のように、外部からの客観的な審査を経ている：日本のチュルク系言語研究者が集まる研究会での口頭発表（1本）、発表前審査有の国際学会での口頭発表（International Society for Dialectology and Geolinguistics）（1本）、発表前審査有の学会発表（日本語学会）（1本）、トルコの査読付き国際学術雑誌(Dil Araştırmaları）（2本）、学内の学術誌（1本）。

本論文では、トルコ語の地域方言にみられる述語形式に関して、モダリティ的な意味を担う形式の意味と機能を発見し、その具体的な使用条件を様々な記述的データを収集することにより分析・検討し、次のような研究目的を掲げて論を進めている。

- (1) 共通トルコ語との比較においてチャナッカレ方言がどのように位置付けられるかの究明
- (2) チャナッカレ方言で発見された・Ik 形式と・mAk var 形式の用法と使用条件の究明
- (3) チャナッカレ方言での同形式の文脈を伴う形での記述データの提示

研究方法としては、母語話者による自然発話に基づく音声資料、映像を使った言語調査などの現

地調査に基づく言語資料を分析することにより、主に次のような具体的な形態的・統語的特徴や意味的特徴を明らかにした。

- 1) 「-Ik 接辞」が成す述語形式は動詞性より名詞性が高く、次の三点の事実から指摘できる。
 - 1) 「-Ik 接辞」構文に人称接辞が付加される時、名詞述語の場合と同様な形で付加される。
 - 2) 述語の否定形の作り方は名詞述語のそれとほぼ同じである。
 - 3) 疑問文にした場合、人称接辞の付加から名詞述語と同様な働きを持つことがわかる。
- 2) 「-Ik 接辞」には屈折的な用法があり、動詞述語構文を成す場合、テンス・アスペクトとモダリティの接辞と似た働きを持つ。この屈折的な働きは「-Ik 接辞」が態の接辞と自由に共起し、テンス・アスペクト・モダリティの意味を表すことによって表現される。
- 3) チャナッカレ方言では、「-Ik 接辞」構文は話し相手が存在する会話においてのみ用いられる。出来事の伝達において話し手自身の立場からの表現がなされ、陳述性のある表現形式となる。さらに方言の用法から共通語の用法への移行がみられ、テンスからアスペクトへ、アスペクトから話し手の認識的な態度であるモダリティへの移行を明らかにした。
- 4) チャナッカレ方言の述語形式「-mAk vā」は不定形を表す-mAkの形態と存在表現「var」の結合により文法化することから生じ、話し手の推論や推定を表す認識的モダリティであり、ミラティヴィティとも関連することを明らかにした。
- 5) 人称制限はないが、3人称の用法が圧倒的に多い。一方、1人称で用いられる場合、話し手の記憶がはっきりしないことと、それに基づく発見を表す。1人称と共起し発見を表わす場合には、さらなる文法化が起こりミラティヴィティに発展したといえる。
- 6) 話し手の認識に注目するため、その認識を相手に質問する形で疑問文にすることができない。場所・時間等を訊ねるときの疑問の副詞とも共起しない。一方、話し手が認識して描いた第三者の様子を相手に確認してもらったときに、否定のコピュラマーカーと疑問詞の組み合わせを用いた確認要求文が成立する。
- 7) 過去形マーカーで表示される場合とされていない場合があり、文脈から出来事が過去ということが明確に解釈されれば、過去形の表示が脱落される傾向がある。

本研究の特色はトルコ語チャナッカレ方言母語話者である Dirik Seval 氏が、日本語学からの研究成果から得られた文末のモダリティなどの文法概念や研究方法に着想を得て、今までに十分な記述的分析がなされていなかったトルコ語の地域方言の分析を行い一定の成果を出したことと、地域方言に関する一次的言語資料としての提示にある。本研究の方法論は、他のトルコ語地域方言にも適用できる可能性があり、将来的にはトルコ語方言研究をさらに深化させるための貢献も見込めるものである。

審査委員から出された意見としては主に次のようなものであった。ムードやモダリティの区別が曖昧であること、ユニークな調査方法も試行されているが、一部の調査方法の目的と説明が明確でないこと、歴史的側面のさらなる考察が文法化の研究の深化につながることを、派生と屈折の折り合

いについての問題点や、方言内での他の分析的な述語形式との比較が不十分であること、予備論文で指摘された問題点を踏まえた修正がなされていることなどが指摘された。

審査委員会は、Dirik Seval 氏の学位請求論文には若干の課題はあるものの、その研究成果の意義を認め、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容であると全員一致での結論とした。